



Title	「感情の制度化」がとらえる愛：オデットとアルベルチーヌ
Author(s)	井上, 直子
Citation	Gallia. 2025, 64, p. 163-173
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「感情の制度化」がとらえる愛 ——オデットとアルベルチーヌ——

井上 直子

『制度化・受動性、コレージュ・ド・フランス講義ノート（1954-1955）¹⁾』に収められた「感情の制度化」は、15ページほどのテクストである。この短い文章において、メルロ＝ポンティは「スワンの恋」と「私」のアルベルチーヌへの想いを考察しているが、ノートという性質上、プルーストのテクストを詳細に分析してみせているわけではなく、自身の思索に合った箇所を挙げるに留まっている。また、「感情の制度化」自体の分析も、刊行された書物のように緻密に書かれているわけではないため、論旨を辿ることは難しい。そこで、分析がどのような視点からなされているのかを知るために、まずメルロ＝ポンティが「感情」をどのようにとらえ、なぜそれを「制度化」しようとしたのかを明らかにする必要がある。

先行研究が「感情の制度化」の解釈を試みる際、『失われた時を求めて』の解釈は、メルロ＝ポンティのテクストに書かれる記述の理解を中心置いている。そのため、プルーストのテクストはあくまでもその題材として論じられており、小説そのものに踏み込んだ論じ方はほとんどされていない²⁾。これに対し、本論文では、メルロ＝ポンティの論を咀嚼し、哲学者の引用を理解した上で、プルーストの他のテクストにおいて「制度化」の概念に基づいた解釈がどこまで可能かを考察する。これにより、メルロ＝ポンティの分析の射程がどこまで及んでいるのかを明らかにしつつ、プルーストのテクストの新たな読みの可能性を示すことができるだろう。

そのため、本論文では、まずメルロ＝ポンティがプルーストの読解を通じて、どのような論理を紡いで結論に至ったのかを辿る。次に、メルロ＝ポンティが取り上げたプルーストのテクストを追い、さらに、プルーストのテクストにおいて、『制度化』の論旨に沿っていながらもメルロ＝ポンティが言及していない部分を取り上げることで、哲学者の思索の射程を明示する。

I. 「感情の制度化」におけるプルーストの「愛」

メルロ＝ポンティはすでに初期の主著『知覚の現象学』において、感情は語と同じように発明されるものであるとして、父子関係のような「人間の身体に刻み

1) Maurice Merleau-Ponty, *L'Institution, la passivité, Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, Belin, 2003. 以下IPと略し、引用文中にページ数とともに記す。日本語では以下『制度化』と表記する。

2) 「制度化」を詳細に解説したものとしては、加國尚志「感情の制度化——メルロ＝ポンティの1954-1955年講義より——」、『立命館文学』、第587巻、313-323頁。

込まれているように見える」感情でさえ、「実は制度である」と記す³⁾。つまり、感情も言語と同様に、何らかの制度の中で決められた約束事になってしまっているということである。メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』において「話された言葉」(parole parlée) と「話されている言葉」(parole parlante) を区別しており、この二つの違いは、「制度として確定されたパロール」と「制度化するパロール」の対比と見なすことができる⁴⁾。感情も同様に、親子関係という確立された制度の中で生じるものと、「制度化」としてとらえられるものとがあり、メルロ＝ポンティは、本論文で扱う『制度化』に関する講義の中で、後者について分析していくことになる。

「制度として確立されたもの」と「制度化するもの」という両者の対立は、意識に関する考察においても見出すことができる。『制度化』に収められた「木曜講義の要約」において、メルロ＝ポンティは、制度化が意識の哲学の困難な点に対する打開策 (remède) であると述べる。意識の哲学において、意識の前にあるのは、意識によって構成された対象である。この時、「意識によって構成された対象には他の視点に向かわせるものは何もなく、意識から対象への交換も運動もない」(IP, 123)。つまり、意識と対象は分断され、両者が互いに働きかけたり、役割を交代したりすることはない。興味深いのは、この対象が自身の過去であった場合である。ここでメルロ＝ポンティは、二つの興味深い指摘をしている。第一に、「私」と呼ばれるのは、「自分でいる」ということだけでつながってはいるものの、現在の「私」に何ら働きかけることのない他者であり、両者の間には分裂が見られる、ということ、第二に、意識が他者を考えるなら、その存在そのものが、意識にとっては純粋な否定である、ということである (IP, 123)。意識はそれ自体完結したものとなっているため、対象である他者は意識の外に置かれ、意識にとって否定となる。つまり、対象としての過去の自分は、意識からすれば他者であり、否定である、ということになる。この両者の間に、交換や響き合いではなく、関係は固定されている。

これに対し、制度化されたものは、過去の中に閉じ込められているわけではなく、現在だけにあるのでもない。過去から現在につながる期間の中に、「私がなりつつある場として」存在する。これをメルロ＝ポンティは、「講義要約」において、制度化された主体とは「他者と私の間、私と私の間に、蝶番のようにあり、私たちが同じ世界に属していることの結果であり、保証なのである。」(IP, 123) と述べる。そしてここから、「制度化」による出来事は、「体験に永続的な次元を与え、それに関連して他の一連の体験が意味を持ち、思考可能な連続や歴史を形成する」と記し、さらに「連続への呼びかけ、未来への要求として、私の中に意味を預け

3) *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, coll. «Tel», 1993, p.220. (以下 PP と表記する。)

4) Parole parlante が制度化されたパロールと同一視できるという点については、廣瀬浩司「意識を治療すること—メルロ＝ポンティの制度化概念とガタリの制度分析ー」、『論叢現代語・現代文化』、筑波大学、第 4 号、2010 年、9 頁。二つのパロールについては拙論「メルロ＝ポンティのブルースト読解—『感情の制度化』とアルベルチーネー」、『ガリア』、第 59 号、2020 年、80-81 頁でも分析している。

る」と解釈する (IP, 123)。つまり、「制度化」されたものは、単独で、断続的なものとして存在するのではなく、他の体験とも関わり合い、過去、現在から未来へと働きかける、連続したもの、ということになる。

では、これを恋愛に当てはめたとき、この「主体」はどのような役割を果たすのだろうか。「講義要約」においてメルロ＝ポンティは、恋愛を二つにわけ、「対象」の内なるイメージについてのみ存在するものと「他者」自身に届くものとを区別する。さらに、「他者に届く愛」を真実の愛として、その愛は「他の誰かによって経験されなければならない」と記し、ブルーストの愛を他者に届かないものととらえて「純粋な否定」と明記する (IP, 124)。つまり講義ノートにおいて、メルロ＝ポンティは、ブルーストの愛がいかに否定の愛なのか、ということを説明していくことになる。ただし、ブルーストの描く愛は、他者を否定するものであっても、決して先に述べたような「構成された主体」によるものではない。このことを考察するために、哲学者は「真の愛」、「真の愛の幻想」、「否定の愛」、「否定の愛の幻想」という四つのステップを設定している。

ここで「講義要約」において「制度化」の定義に「蝶番」という言葉が用いられていることに注目しよう。この時「制度化」には、蝶番によってつなぎとめられた「他者」が必要であるということになる。これに関してメルロ＝ポンティの考えを要約すると、次のようになるだろう。まず、感情にはもともと真実も偽りもなく、感じた瞬間に真実となる。ただし、この瞬間には「決断」が必要であり、その決断を支えるのは他人による反応である。つまり、ここには他者が形成され、「応答」している。「構成された関係」にある意識と対象が、互いに分断されたままの状態にあるのとは異なり、「制度化」の関係には他者からの反応がある。これが、外部からの「応答」として、主体に働きかけてくることになる。さらに、この他者は自分と同様に自由な存在である (IP, 63)。この時の他者とはもちろん、愛の届く方の存在を指している。

ここからメルロ＝ポンティは、愛の本質として四つの特徴を挙げる。1) この自由を密かに意識すること、2) 自由が他者によって脅かされていることを意識すること、3) 自分を他者に認めさせ、補足させようとする意志、4) (この基盤の上に構成される)「共同」生活、である。さらに、ここから、愛の批判として a) 主觀性、b) 自己満足、c) 偶然性を挙げる (IP, 64)。これが「真の愛」である。しかし、メルロ＝ポンティは、ブルーストの描く愛にこれらの本質を認めず、「関わることが不可能な、想像上のものとしての愛」が描かれているとする。つまり、この愛に他者はいないということになる。これが「真の愛の幻想」である。ただしこの後、ブルーストはこれが真実の半分に過ぎないと見抜いていた、として、「愛されたいと思うことは、愛することを意味する」と付け加えられる (IP, 64-65)。要約すれば、「愛されたい」と「愛する」が揃って初めて真実の愛となる以上、そこに他者が必要ということになるのだが、ブルーストの描く愛には他者がいないため、真の愛とはなりえない、ということになる。

メルロ＝ポンティはここまで考察した上で、初めてアルベルチーヌの名を出し、

「不在こそが愛を生み出すのではないか」(IP, 65) という新たな問題提起を行う。ただし、その際、一旦「スワンの恋」にテーマを移し、「欲望」と「疎外」について述べ、この恋がスワンによる一方的なものだった、と結論づけて、再びアルベルチースの考察に戻る。メルロ＝ポンティのアルベルチースに関する分析は、「私」がアルベルチースその人ではなく、アルベルチースの中の「他者」を愛していること (IP, 68)、アルベルチースの愛を疑い、自分が愛されていないと思っていること (IP, 68)、「私」が自身の愛する能力に疑問をもっていること (IP, 68)、という三つの視点からなる。これらはいずれも、「不在が生み出す愛」について明らかにするためのものである。ただし、ここで一つの疑問が生じる。制度化の役割が「他者との蝶番」であるにもかかわらず、他者の不在こそが愛を生み出すとは、どういうことなのだろうか。

ここでは論の骨子を辿るにとどめるが、まず、「私」はアルベルチースのことを、バルベックの娘たちの一人としか見なしていない（と思っている）。この時、アルベルチースは私にとって、必ずしも存在しなくてはならないものではない。また、第二の点、「私」がアルベルチースから愛されていないと思っていることには、同性愛のテーマも含まれる。そしてこの点を深めていくと、第三の点、「私」が愛する能力を持っていないために、アルベルチースからも愛されないと考える、という地点に至ることになる。

この第三の点が、メルロ＝ポンティによる「制度化」の分析の中で最も難解なところである。「私」はアルベルチースから愛されようとは思わず、自分の心の中にアルベルチースを取り込み、その存在を愛する。この時、実際のアルベルチースは「私」にとっては不在である。つまり、「私」にとって、他者というのは「不在」という形で存在しており、「私」は不在の他者を愛することになる。「講義要約」で述べられた蝶番の関係は『制度化』では鏡の関係と同一視される。蝶番（鏡）は他者を必要とするのだが、アルベルチースの場合は、その他者とは「不在の他者」ということになる。自分のことを愛せない「私」は、不在の他者との鏡の関係を構築する。よって、この愛はそもそも否定なのである。これが「否定の愛」であり、アルベルチースへの否定的な愛が至るのは別離と死であるとされる。ただし、この「否定の愛」は、アルベルチースがアルベルチースでなければならなかつた、という気づきにより、もう一度ひっくり返される。これが「否定の愛の幻想」である。つまり、「眞の愛」と「否定の愛」は互いにからまり合いながら、新しい段階へと達していく。このように発展していくことが、「構成された主体と対象」の関係ではなく、「制度化」の本質、ということになる。結論として、メルロ＝ポンティは、すべての偶発性は、たとえ根本的に偶発的な偶発性であっても、最後には望まれて起こる、と解釈している (IP, 77)。つまり、偶然に起こったように見えることは、実はすでにどこかで望まれており、それが芽吹いたのである。これについては、のちにスワンとオデットの関係に照らして考察する。

一方から他方への働きかけがない「構成された関係」とは異なり、「制度化」の関係においては、双方が「応答」の関係にあり、過去が現在に影響を与え、さら

には未来にも作用していく。メルロ＝ポンティがブルーストのテクストに読み取ったのは、スワンや「私」の恋愛に見られるこうした相互作用だった。次節では、実際にメルロ＝ポンティが引用したテクストを挙げつつ、「スワンの恋」とアルベルチーヌをめぐる学者の解釈を辿ったのち、他の箇所に現れる「制度化」のテーマを分析していく。

II. 「スワンの恋」

「スワンの恋」は、「私」が生まれる前の物語である。劇場でスワンと知り合っていたオデットは、ヴェルデュラン夫人（のちにゲルマント大公妃の地位を射止める）のサロンにスワンを連れてくる。以来、スワンはヴェルデュラン家のサロンの常連となり、オデットにも激しい愛情を注ぐ。しかし、ヴェルデュラン夫人の好む演劇に対し、スワンが否定的な意見を言ったことから、スワンはサロンから追放される。オデットに会うことが難しくなったスワンは、さらに恋に身を焦がすが、やがてその恋心が消える。「スワンの恋」はここで幕を閉じるが、その後スワンはなぜかオデットと結婚しており、その経緯は明かされていない。

『制度化』のテクストで「スワンの恋」が取り上げられるのは、本文では2ページほどに過ぎない。メルロ＝ポンティは、「スワンの恋」には「愛されたい」と「愛する」という二つの要素が揃っていないと考え⁵⁾、「愛が一方にしか存在しないので、これは実証的なものではない」と述べて分析を切り上げる (IP, 67)。ただし、そこでは「欲望」と「疎外」という、他者に関する重要な概念が考察されており、「疎外」の概念はアルベルチーヌとの愛にも関わることになる。

この作品について、メルロ＝ポンティは「私たちは自分自身の外に出ることはない」としながらも、人が知覚したり愛したりするのは自分自身ではない、という考え方から、自分と相手の間に一つの制度化 (institution) があるとし、分析を開始する (IP, 66)。項目として挙げられているのは、1) 矛盾としての欲望の現実、2) a) 疎外としての愛の現実、b) 疎外ではない愛の現実である。

メルロ＝ポンティによれば、欲望は所有を目的としていない。なぜなら、所有してしまうと満足できなくなるからである。このとき、「素晴らしい」存在としての他者 (IP, 66) が常に必要とされ、主体は欲望を抱きつつも、所有という解決には至らないという矛盾した状態の中に置かれる。つまり、スワンの恋は、所有に至る前の、欲望に駆られた状態ということになる。では、疎外とは何だろうか。

メルロ＝ポンティは、「愛する者は自分自身を他者にする」と記し、オデットを愛するスワンが「自分自身に抱くはずの憐れみの情をむしろオデットに感じて、『かわいそうに』と呟いた。」(I, 277) という箇所、写真や現実のオデットと、スワンの中のオデットとが同じものと思えず、目の前のオデットを「これがあの女

5) スワンは「すでに達観した年齢に近づき、愛しているという喜びのため、愛していることに満足し、愛されることを求めて」(I, 193) とされ、メルロ＝ポンティはここを引用している。『失われた時を求めて』からの引用は Marcel Proust, *La recherche du temps perdu*, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», quatre tomes, 1987-1989. 引用の後のローマ数字は巻数、アラビア数字はページを表す。

か」と思ってしまう、という箇所 (I, 303)、オデットを所有できないという不安に比べると、オデットの魅力など取るに足りないものと思える、という箇所 (I, 340) を挙げる。すなわち、メルロ＝ポンティの考える疎外とは、恋愛によって自己の認識や現実の認識に齟齬が生じている状態を指す。これに対し、「疎外のない状態」として結婚が挙げられる。スワンがオデットと結婚したということは、疎外のない状態に至ったと解釈できるが、メルロ＝ポンティはスワンが「疲労と倦怠の状態にある静かなオデット」と結婚する、と記すのみ (IP, 67) で、結局オデットがスワンを愛していないために、スワンの恋は自己愛的なものにとどまる、として「スワンの恋」の分析は終わる。

それでは、「スワンの恋」において、メルロ＝ポンティが引用していない箇所にも『制度化』における考察を当てはめることはできるだろうか。

第一に、スワンには「構成された主体」の項目で述べられる、現在と過去の自我の分断に関する描写が見られる。スワンはオデットと出会った頃、出会う前の自分と、今の自分が「同じ人間ではない」と思い、「新しい存在が自分とともにいる」ことを知る (I, 225)。その後、恋に落ちてからはオデットに夢中にならない日がくると思うと、ぞっとする。しかし、物語の終盤では、「いつまでも好きでいたい」という欲求が弱まってしまう (I, 371)。このとき、「夢中にならない日が来ると思うとぞっとする」スワンと、思いの冷めたスワンは「別人」である。「存在しない以前の自分の感情に従うことなどできない」と書かれており、二つの自我は完全に別のものとなっている。

第二に、スワンの恋が一方的なものではなかったと受け取れる描写がある。スワンがヴェルデュラン夫人のサロンから追放されたのち、夫人の「信者」たちは船旅に出ることになる。ある時その旅がアルジェからギリシャを経て小アジアにまで及び、一年近くかかることになった。ある時スワンはその旅から帰ってきたコタール夫人とばったり会う。夫人は船旅の間中、一行がスワンの話で持ちきりだったと明かし、オデットはあなたのが大好きだ、と伝える (I, 369)。オデットはスワンが「今頃どうしているのか目に浮かぶ」と言い、ヴェルデュラン氏にも「親しい女の目には何でも見える」と話していた (I, 369)。ここにはオデットの思いも描かれており、二人の関係は一方的なものではない。もちろんこれがオデットの嘘である可能性はあるが、このことによりスワンは穏やかな気持ちになるという働きかけを受けている⁶⁾。

第三に、偶発性が望まれて起こる (IP, 77) ということについてである。ある日、ヴェルデュラン夫人のサロンに行ったスワンは、オデットがいないことを知り、カフェに探しにいく。しかしオデットは見つからない。スワンはレストランをすべて探そうとし、御者にも探させる。御者が戻ってくると、オデットのことはあえて聞かず、無関心を装う。御者に「帰るほかない」と言われたことにより、無関心を装う余裕もなくしてしまい、どうしても見つけ出そうとして、最後まで開

6) ただし、スワンの恋はもう冷めていて、ここから再燃することはない。上で述べたように、オデットに夢中だったスワンは、今のスワンとは「別人」になってしまっている。

いていたレストランに行く。さらに、御者に、うまく見つけ出したら褒美をやると言う。このときのスワンの気持ちは、御者とスワンの思いがぶつかることで、オデットが家に帰って寝てしまっていても、通りのどこかのレストランに出現させることができると言わんばかりであった（I, 227）、と記される。つまりスワンは、オデットに会うという偶然を、自身の強い望みのよって起こさせようとしている。こうしてスワンはカフェ・アングレなど、有名な店を順番に覗いていく。その結果、通りの反対方向からやってきたオデットとぶつかるのである。このようにオデットと道で会うという偶然は、スワンの必ず会うという強い意図により実現する。つまり、この偶然はスワンの意図が引き起こしたものであり、スワンの望みによって生じたものであると言える。

III. アルベルチーヌに関する記述

まず、『失われた時を求めて』におけるアルベルチーヌの物語を要約しておこう。「私」はバルベックでアルベルチーヌに出会い、最初はそこで出会った娘たちの一人、という認識しか持たない。やがて恋心を抱くようになるが、アルベルチーヌとの結婚は愚かしいと感じて別れを決意する。しかしアルベルチーヌが「ヴァントゥイユの娘を知っている」と言ったことをきっかけに「私」は嫉妬に駆られ、母親に「アルベルチーヌと結婚しなければならない」と宣言して自分の屋敷に住まわせる。ところが、一緒に住んでみると「私」は彼女を愛していないと感じる。そんなある日、アルベルチーヌが出奔する。「私」は呼び戻そうと躍起になるものの、次第に思いは冷めていく。そんな中、アルベルチーヌが事故で死んだという知らせが来る。「私」はその後もアルベルチーヌの同性愛を疑い続けるが、やがて探求する情熱も失せ、ある日アルベルチーヌが生きているという電報が届いても、何も感じない。そしてヴェネツィアの町で「もう彼女を愛していない」と思うのである。

先に『制度化』の論理を整理した際、「私」が愛しているのはアルベルチーヌの中の「他者」であること、「私」は自分が愛されていないと考えており、愛する能力に疑問をもっていることを挙げた。では、それぞれについて、メルロ＝ポンティはブルーストのどのテクストを読んだのだろうか。

第一の点について、この場合の他者とは、アルベルチーヌである必要のない、バルベックの「一般的な娘」を指す。確かに「消え去ったアルベルチーヌ」において、「私」は「娘たちの間で迷い続けた」と言い（IV, 86-87）、アルベルチーヌは娘たちを代表し、娘たちの要約であると述べる（IV, 142）。つまり、愛する対象がアルベルチーヌでなくてはならないということは繰り返し否定され、唯一無二の愛の対象は不在となっている。

第二の点については、「ソドムとゴモラ」の一節がとりあげられる。仲違いを終わらせた「私」への褒美として、アルベルチーヌが、これまでしたことのない愛撫をする、というシーンである（III, 229）。「私」は、相思相愛ではない恋愛において与えられたこの「幸福のかけら」を、二度とアルベルチーヌに会わずに持ち

続けるべきだったと考える。メルロ＝ポンティはこの箇所について「あまりに明白で、自分が愛している、自分が愛されている、相思相愛であると思うことができない」と解釈し、この自信のなさが「私」の愛に自己愛的な側面を与えていたと結論づける (IP, 134)。

第三の「愛を不可能にしているのは自分自身である」という指摘は「制度化」において極めて重要なポイントとなる。メルロ＝ポンティはここで、「ソドムとゴモラ」に描かれる「二段階のリズム」(III, 223) に注目する。「二段階のリズム」とは、「自分自身を疑うあまり、女がいつか自分を愛してくれるとも、自分が女を愛することができるとも信じられないあらゆる男たちの愛が辿るもの」と記述される。このように、愛が信じられない「私」は、自身の愛を現実の存在ではなく、心の中の存在、すなわち「不在の他者」へと向ける。メルロ＝ポンティはこれについて、「ソドムとゴモラ」の一シーンを示す。アルベルチースがバルヴィルに停まった汽車から降りる際に、「私」が娘を「私から少し離れたところではなく、私の心の中に配置しなければならない」と考えるシーンである (III, 501)。わずかな距離が「私」に激しい苦痛をもたらし、それを癒すのは「アルベルチースが一緒にいてくれること」なのだが、小説では「距離」を毒薬、「ともにいてくれること」を治療薬と言い表しており、この二つはどちらもアルベルチースから生じる (III, 503)。メルロ＝ポンティはこの箇所について、毒薬を不在、他者性とみなし、治療薬を不在の抑制ととらえているのだが、結局、このどちらも「私」の欠乏を解決することはないと見なす。そして、このシーンを、「私」に届くような他者ではなく、人生の地平全体を占めるような他者が存在する、と解釈している。つまり、「私の心の中」に配置されたアルベルチースは、「私」に届くことはないのである。

このように、アルベルチースへの愛は、不在のものに対する愛であり、達成不可能な愛である。メルロ＝ポンティはこのことについて、愛の到達点を「所有の現実」なのか、あるいは「他者による疎外の現実」(aliénation par autrui) なのかと自問する (IP, 70)。スワンの恋が、曲がりなりにも結婚という「疎外のない愛」の形を取ったのに対し、「私」の愛は、否定の上に構築された愛であり、所有に至ることはない。メルロ＝ポンティはこの愛の結論を「別離と死」とし (IP, 75)、別離の解釈として、「囚われの女」から「消え去ったアルベルチース」への転換点 (IP, 68) に着目している。「私」はアルベルチースの出奔を知るまで、アルベルチースのことを愛していないと思い込んでいた。しかし、「揮発状態」(à l'état volatil) にある心の構成要素が固定化され始めると、これらの要素に気づくことができ、自分の心が「塩の結晶作用のように」認識されるようになる (IV-4)。つまり、決定的な「不在」によって、「私」の愛は強固になったということであり、これは「否定の愛」である。ほどなくアルベルチースの死の知らせが届く。

その後、「私」の心にある重要な変化が生じる。ついに「私」は、相手がアルベルチースでなくてはならなかったということに気づくのである。「私」は新しく出会う娘がアルベルチースのように、ヴァントゥイユの音楽を聞いたり、エルヌチールの話をしてくれたりすることを願うが、それが叶わず、「それができない女たち

の愛は到底アルベルチースの愛には及ばない」と思う(IV, 135⁷⁾)。そして、「私の幸福の再生に不可欠なもの、私が求めていたもの、すなわちアルベルチースその人の不在」を痛感するに至る(IV, 135)。つまり、否定の形でしか継続されないと思われていたアルベルチースへの愛が、もう一度反転して新たな形をとることになる。これが否定の愛の幻想である。そして、ここから忘却が始まる。このように「私」の心の中で忘却が進んでいったある日、アルベルチースからの電報が届く。しかし「私」はそれによって心を動かされることもなく、やがてアルベルチースのことを忘れる。

ここまで、蝶番のような関係にある「私」とアルベルチースの愛の流れを、メルロ＝ポンティが分析したテクストに基づきながら辿ってきた。それでは、『制度化』において引用されていない箇所にも、メルロ＝ポンティの論理を持ち込むことはできるだろうか。

第一に、「スワンの恋」と同様、「消え去ったアルベルチース」においても、自我的分断が見られる。娘を忘れることに成功した「私」は、愛していたという事実だけを未来への私に伝えることになる。「新しい自我は古い自我の傍らで大きくなり、この古い自我、すなわち古い自我がアルベルチースについて集めていた話を通じて、アルベルチースを知っている気になり、好ましく思い、好きになった。しかしこれは受け売りの愛情にすぎない」(IV, 175)。この記述では、新しい自我は古い自我から情報を受け取るのみで、両者の間には連続性はなく、もはや同じ人間ではなくになっている。

第二に、「偶発性が意志によってもたらされる」ことについて、二つの描写を取り上げたい。まず、アルベルチースへの愛の結論は別離と死だったが、実は「私」は娘の死を願っていたことがある。「囚われの女」において、「私」は「アルベルチースにどんな災いも起こらないことを願っていた」と書きながらも、娘が馬に乗ってどこかに行ってしまい、帰ってこなければいい、と思う。これに対してアルベルチースは、そうなったら「私」は自殺してしまうだろう、などと返す。興味深いのはこれに続く。「我々が誠実さから送りつける真実よりももっと深い真実が、誠実さとは違った道から表現されたり予言されたりすることがある。」(III, 628) という表現である。アルベルチースが馬に乗って死ぬことは、本心ではないところで言葉にされ、それが予告になっていた。アルベルチースの出奔後、「私」はもう一度同じ思いを抱き、もしアルベルチースの身に何らかの事故が起ければ、嫉妬に永久に毒されることもなく、苦痛が消滅して平穀を取り戻す、と考える(IV, 57)。その後、アルベルチースの叔母のポンタン夫人から電報が届き、アルベルチースが「乗っていた馬から投げ出され、木に激突し」て亡くなったと告げてくる(IV, 58)。つまり、本心からではなかったとはいえ、「囚われの女」での「私」の思いが実現することになる⁸⁾。

7) 実は「囚われの女」にも「これまでの恋はアルベルチースへの恋の準備に過ぎなかった。」(III, 757) という一節があるのだが、「私」はこの点を深く掘り下げるとはしない。

8) 同じようにスワンもオデットの死を願うが、こちらは実現されない(I, 349)。

次に、アルベルチーヌの死後、「私」の元に届く電報についても考察しておこう。アルベルチーヌを忘れ始めた頃、「私」は母とヴェネツィアに旅立つ。そんなある日、「私」のもとにアルベルチーヌからの「私は生きていて、いたって元気です」という電報が届く(IV, 220)。しかし、「私」はこの電報に心を動かされることはなく、ついにアルベルチーヌのことを完全に忘れる。そんなある日、「私」はジルベルトからの手紙を受け取る。その中には、電報を打ったことが書かれており、「私」は初めて、先の電報がジルベルトからきたものだということを理解する(IV, 234)。では、ここで「私」が電報を受け取ったことは物語の中でどんな意味を持つのだろうか。「私」はアルベルチーヌの出奔後、彼女を何とかして取り戻そうとしながらも、本心を偽った手紙を書いていた。しかし、ついにあらゆる作戦をかなぐり捨て、「帰ってきてほしい」と書き送る。その後に死の知らせが入るのだが、そのあとで「私」はアルベルチーヌからの手紙を受け取り、そこには「もう一度家に置いてほしい」と書かれていた(IV, 60)。この時、二人の間は、一瞬だけ「眞の愛」によって結ばれる。しかしアルベルチーヌの死は事実であり、変えることはできない。そこに、偶然、あたかもアルベルチーヌが帰ってきたかのような電報が届く。ただし、ジルベルトの筆跡のクセについては、「花咲く乙女たちのかげに」すでに記されており、そこでは、ジルベルトの署名が「飾り文字のGが点を省いたiに寄りかかってAに見えるうえ、最後のシラブルがぎざぎざの飾り書きとして長く延ばしてあった」(II, 493)ためにジルベルトとは読めない、と書かれている。この記述は、GirbertをArbortと読ませ、さらにteの部分をぎざぎざに書いて延ばすことで、Arbertaineという名を予告している。「私」はこの時はまだアルベルチーヌと出会っていないが、不思議なことに、この出来事は未来の恋愛の予告になっているのである。さらに、ジルベルトの筆跡の特殊性という過去の事実が、アルベルチーヌの死という現在の事実に関わり、アルベルチーヌが生きているかもしれないと思わせることで、アルベルチーヌのいる未来という幻想を抱かせている。

メルロ＝ポンティの考える「他者を必要とする」愛は、アルベルチーヌにおいては当てはまらず、「制度化」が生み出す蝶番は、「不在の他者」と愛のない「私」による否定の愛をつむぐように見える。しかし、この愛は、のちに他者を必要とする愛であったことがわかり、否定の愛は幻想に終わる。ただし、「制度化」の分析はここでは終わらない。「私」は自身の愛に気づいた途端、逆にアルベルチーヌのことを忘れていくからである。それゆえメルロ＝ポンティは「私たちは不在のものしか愛さない。愛は私たちの中に空洞であり、他者の不在である。」(IP, 74)と述べる。このように、固定されたシステムに留まることなく、絶えず刷新されていく状態こそが、メルロ＝ポンティの言う「応答」であり、「制度化」の持つ意味なのである。

* * *

メルロ＝ポンティは、『知覚の現象学』を執筆していた頃から主知主義を「上空飛行」、「パノラマ」と批判し、対象と絡み合う、ということをさまざまなテーマ

で検討してきた。「この探求は晩年、対象から侵食され「木から見られる」主体となったり（『眼と精神』）、他者のまなざしに「自分が見ていない自分」がいるとして、コギトの追求を他者の手に委ねたり、対象と絡みあったり（『見えるものと見えないもの』）という考察へと移っていく。中期の思索である『制度化』は、まさにその過渡に位置づけられる著作であると言えるだろう。

『知覚の現象学』にはもう一つ興味深い記述が含まれる。「真の愛は、私が変化するか、愛人が変化した時に終わる。虚偽の愛は私が私に戻った時、虚偽であつたことが暴露される」(PP, 434) というものである。『失われた時を求めて』の語り手「私」は、自分が愛したのはアルベルチースでなくてはならなかつたと気づいたときから、逆にアルベルチースのことを忘れていく。一方、「スワンの恋」の物語は、スワンがオデットに対して「好みでもない女だというのに」(I, 375) と考えた時に終わる。『知覚の現象学』序文において、「現象学とは、注意と驚き、意識に対する要求、世界と歴史を生まれいざる姿において把握しようという意図、という点で、バルザック、プルースト、ヴァレリー、セザンヌの作品と同じように骨の折れるものである」(PP, XVI) と記した哲学者は、プルーストの描く恋愛に自身の感情の分析を早くから重ね合わせていたのかもしれない。

（大阪教育大学教授）